

<実践研究報告>中級日本語学習者のレポート評価に関する実践報告

著者	安達 万里江
雑誌名	関西学院大学高等教育研究
号	9
ページ	69-80
発行年	2019-03-22
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027646

中級日本語学習者のレポート評価に関する実践報告

安 達 万里江 (国際学部)

要 旨

本稿は、関西学院大学国際学部の日本語クラスで「中級日本語学習者のレポートの評価はどのような評価基準を持って評価することが望ましいか」について探ることを目的とし、書く能力が中級レベルの日本語学習者を対象に行った評価活動についての実践報告である。

まず、学習者が評価基準を可視化できるよう、ループリックを作成した。そして、そのループリックを用い、教員だけでなく学習者にも最終課題レポートの自己評価をしてもらった。その結果、総合評価では評価の一致が見られなかった。しかし、1つの項目・項目群「文の長さ」が、学習者個人で見ると、「構成」「内容」面で評価の一致が見られた。

その要因として、文の長さについては「明確な記述」であったこと、また、実践の振り返りから、「肯定的なフィードバック」の有無・頻度が考えられる。他方、評価が不一致となる要因として、「評価の厳しさ（甘さ）」が検証すべき課題であると考えられる。これらのような課題解決のためには、本実践の継続、質的・量的な学術的検証が必要であると言えよう。

1. はじめに

1.1 実践の背景

外国語として国内外の日本語学習者が受験する「日本語能力試験」^{註1}の日本国内における受験者数を見ると、N2レベルの受験者数が最多で、次にN3レベルが多い(図1)。つまり、国内の日本語教育現場(以下、現場)においては、中級レベルの日本語学習者(以下、学習者)が多数を占めていると言える。そして、殊に日本の大学に在籍する学習者たちは、日本語能力試験に出題されるような言語知識(文字・語彙・文法)、読解、聴解以外にも、ライティング能力も必要とされていることが予想される。

しかし、本実践にも関わる「日本の大学のアカデミック・ライティング」の評価研究の対象者を概観すると、上級レベルの学習者(主に学部の留学生)、あるいは日本語母語話者が多く、中級レベルの学習者・文章を対象としたライティングの評価研究は少ない。中級レベルの学習者の作文・レポート等も、殊に大学では日常的に評価されていると考えられる。

他方、これまでの「日本の大学のアカデミック・ライティング」の評価研究を集約するような

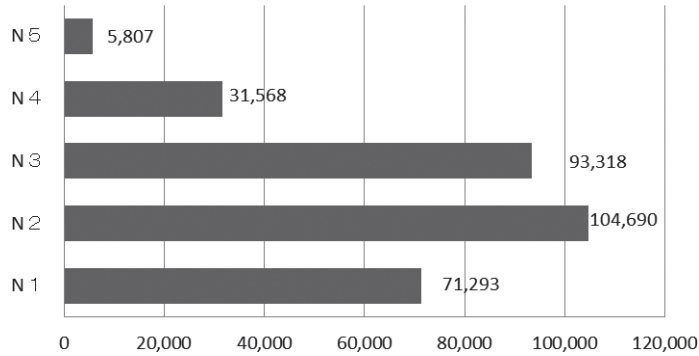


図1 2017年日本語能力試験国内受験者数^{注2}

課題の1つに「評価には不一致（ばらつき）が見られる」という課題がある。

日本の大学に在籍する留学生を対象に、約20年にわたり日本語のアカデミック・ライティングの評価研究を行ってきた田中（2016）は、複数の教員評価における「ライティング評価においての評価の不一致（ばらつき）をもたらす要因」として、以下の3点を挙げている。

- 1) スクリプト（書き手の第二言語のライティング能力）
- 2) 評価基準や評価方法（評価者おのおのの優先順位）
- 3) 評価者（評価に対する姿勢やライティング観）

上記1)～3)より、ライティング評価においての評価の不一致をもたらす要因というのは、「書き手よりも評価者」つまり、「学習者の日本語力」よりも「教員の評価者としての知識や技能」である「評価リテラシー」^{注3} によるところが大きいと言えよう。

それでは、評価者である日本語教員が、評価基準や評価方法を明確に示し、ライティング能力向上のための日本語指導を行った場合、どのような効果があるのだろうか。

1.2 実践の目的

そこで本実践では、関西学院大学国際学部で日本語教育の現場を持つ筆者が、「中級日本語学習者のレポートの評価は、どのような評価基準を持って評価することが望ましいか」について探ることを目的とする。そのため具体的には、まず、近年、広く初等・中等・高等教育の評価・採点ツールとして用いられることの多い「採点ルーブリック」^{注4}（以下、ルーブリック）を採用し、作成する。そして、学習者に評価基準を可視化させ、教員だけでなく学習者にも「最終課題レポートの自己評価」と称し、学期末に評価を行ってもらおう。そして、教員・学習者間の評価の一致・不一致があるところを結果に示した後、上記1)～3)の観点をを用い、考察を加える。最後に、今後の課題と展望について述べる。

2. 実践の具体的内容

2.1 実践を行った現場

本実践の場となったのは、関西学院大学国際学部の English-based Degree Program（略称：

表1 「Japanese III-1」の目的・到達目標・レポート作成の指導内容

授業目的	レポートや論文を書くために必要な語彙力・表現力を身につけ、自分の考えを適切に表現できる日本語能力の獲得を目的とする。	
到達目標	・ レポートや論文で自分の考えを適切に表現できるようになる。 ・ 読み手にわかりやすい論理展開の文章が書ける。	
	レポート作成の指導内容	
1	第1課：簡潔に回答する	図書館でテーマ探し
2	第2課：情報を文章にする	テーマ決め／資料集め
3	第3課：状況を説明し、意見を述べる	
4	第4課：段落を作る	構成メモ作成
5	第5課：体験したことを報告する	
6	第6課：テーマに沿った意見文を書く	レポート作成①序論
7	第7課：自分をアピールする文を書く	推敲（フィードバック）
8	第8課：順序立てて、レポートを書く	レポート作成②本論
9	第9課：引用して、レポートを書く	推敲（フィードバック）
10	第10課：資料を利用して、レポートを書く	レポート作成③結論
11	読み手への配慮	推敲（フィードバック）
12	最終課題レポートの評価	最終課題レポート提出

EDP)に在籍する外国人留学生(English-based International Student:以下、学習者)を対象とした言語教育科目で、選択必修科目の第1外国語科目「Japanese III-1」読み書き(RW)を中心に行う中級後半レベルのクラス^{注5}である。2018年度春学期の受講生は6名であった。

本科目の「授業目的」と「到達目標」、そして週2回、全28回の授業のうち、レポート作成に関する指導内容の部分を抜粋し、表1に示す。

使用テキストは、『中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶための日本語ライティング 短文作成からレポート作成まで(Academic Writing for International Students)』を選び、第1課～10課を適宜使用、レポート作成のために必要な知識・技能の指導を行った。そして、学期中に本実践報告について説明し、作文データの公開と同意書の記入を依頼したところ、受講生6名のうち4名(以下、S1、S2、S3、S4)からの同意を得られた。

2.2 実践の流れ

実践の流れとして大きく3つに分け、本稿に示す。

- ①学習者のわかる日本語で評価基準を示すため、初回授業で作文データを収集(資料1)
- ②収集した作文データを基にルーブリックを作成(資料2・3)
- ③採点ルーブリックを用いた評価活動の手順(「2.5 ③評価活動の手順」に記載)

2.3 ①作文データの収集

初回授業では「あなたが関西学院大学国際学部に来てからの生活について」400字程度、約30～40分で書いてもらった。上記テーマの作文で同意を得た4名(S1～S4)の作文データを参考資料として公開する(資料1)。

2.4 ②ループリックの作成

ループリックは、一から作成するには非常に時間と労力がかかる (Stevens & Levi : 2012、佐藤監訳 : 2014)。そこで、田中・阿部 (2014) 『Good Writing へのパスポート—読み手と構成を意識した日本語ライティング—』にある「Good Writing のための評価基準：トレイト別・基準説明」を参考に2種類作成した (資料2・3)。ほぼ記述内容は変わらないが、1つはフィードバック用にチェック式にし、もう1つは採点用に配点・採点記入欄を設けた。

「学習者のわかる日本語」であるかどうかの確認は、作成後 (学期開始から約1か月後)、授業内容を振り返るための個人面談を行った際に行った。ループリックの記述文について確認したところ、受講生6名全員から「難しくない・問題ない・理解できる」との回答を得た。

2.5 ③評価活動の手順

教員・学習者による評価活動の手順について、以下1)～4)に示す。

- 1) 最終課題レポート提出前に、採点ループリックを授業内で公開^{注6}
- 2) 学習者の自己評価は課題提出の直後、授業時間内に実施
- 3) 教員は授業時間外に評価・採点を実施
- 4) 提出したレポート、教員・学習者のループリックをまとめ、学習者に返却

3. 結果

まず、教員評価、学習者の自己評価の結果を表2に示し、続いて教員・学習者間の評価の一致・不一致について、総合評価、各項目群の評価、各項目評価より結果を示す。

3.1 総合評価の結果

最終課題レポートは50点満点とし評価した。結果として以下のことが分かった。まず、総合点に一致は見られなかった。次に、全体的には教員の評価よりも学習者の自己評価の点数の方が7～4.5点 (14%～9%) 高い傾向が見られた。しかし、教員評価の一番良かったS1のみ、自己評価の点数が教員よりも9点 (18%) 低く、評価に差があった。

表2 教員評価・学習者の自己評価

T : 教師 S : 学習者	日本語 (30)		構成 (12)	内容 (6)	文章の長さ (2)	合計 (50)	総合得点差 (T-S)
	正確さ (12)	適切さ (18)	文のつながり	意見・話題			
T (S1)	11	18	9	4	2	44	9
S1	7	13	7	6	2	35	
T (S2)	8	13.5	11	6	2	40.5	-4.5
S2	12	15	10	6	2	45	
T (S3)	9	12	8	4	2	35	-7
S3	10	16	8	6	2	42	
T (S4)	7	11	6.5	3	1	28.5	-4.5
S4	8	12	8	4	1	33	

■ は、評価の一致が見られたところ

3.2 各項目群の評価

続いて評価を項目群別に見てみる。先ほど示した表2より、完全な評価の一致が見られたのは、「文章の長さ」であった。それ以外の項目群による一致は見られなかった。そこで、一致の見られなかった4つの項目群「日本語（正確さ）」「日本語（適切さ）」「構成」「内容」からの結果を、教員・学習の評価で比較をするため、図2に示す。

その結果、「構成」では1名（S3）、「内容」では1名（S2）の評価の一致が見られた。また、「日本語（正確さ）」と「日本語（適切さ）」については、S1以外は教員評価よりも自己評価が4～1点（8～2％）高かった。続いて、学習者による自己評価の結果を個別に見てみると、以下のような結果になった。

学習者ごとに見ると、S1は先ほど述べたように、教員の評価より低かったが、「内容」のみ自己評価の方が2点（4％）高かった。「日本語（正確さ）」と「日本語（適切さ）」に関しては、教員と学習者の得点差が他より大きく、「日本語（正確さ）」は4点（8％）、「日本語（適切さ）」は5点（10％）と得点に差があった。続いて、S2は、日本語に関しては「正確さ」「適切さ」のどちらも自己評価の方が4～1.5点（8～3％）高かった。また、「内容」に関しては評価の一致が見られ、「構成」では自己評価の方が1点（2％）低かった。S3は、「構成」の評価は一致したもの、それ以外は自己評価の方が4～1点（8～2％）高かった。最後にS4は、全ての項目群に関して自己評価の方が1.5～1点（3～2％）高かった。

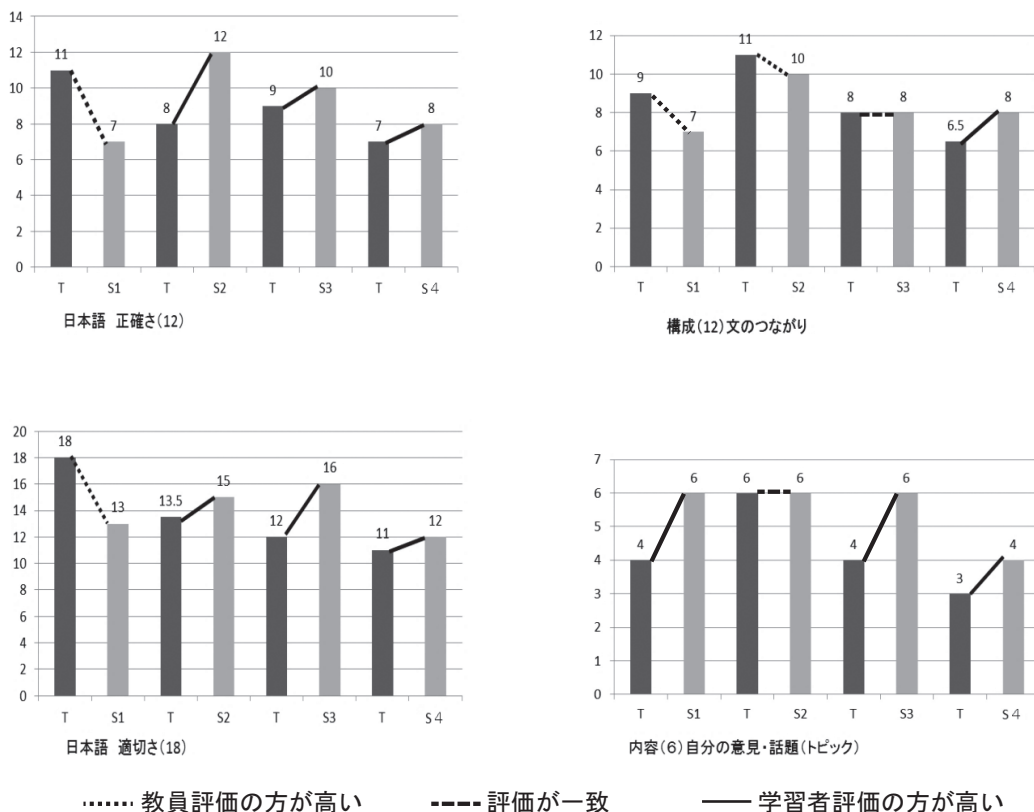


図2 各項目群別で見る教員・学習評価の比較

表3 3名一致 (75%) と1名のみ一致 (25%) の項目

項目群	3名一致 (75%) の項目
日本語 (適切さ)	語彙・表現が適切に使われている。
日本語 (適切さ)	相手 (読み手) を意識・配慮した文が適切に書けている。
構成	構成 (文章・段落のつながり) がわかるように書いている。
構成	文と文をつなぐ接続表現 (「たとえば」「しかし」など) が効果的に使われている。
構成	指示語 (「この」「その」など) が効果的に使われている。
項目群	1名のみ一致 (25%) の項目
日本語 (正確さ)	文型・構文が正確に組み立てられている。
日本語 (正確さ)	表記 (ひらがな・カタカナ・漢字) に間違いがない。
日本語 (適切さ)	文末スタイル (「普通体」あるいは「丁寧体」) が適切に使われ、統一されている。
日本語 (適切さ)	表記 (漢字やカナ、句読点や符号、数字など) が適切に使われ統一されている。
内容	自分の意見 (一番言いたいこと) がはっきり書いている。

3.3 各項目評価

まず、全17項目のうち、評価の一致が見られたのは、S1が6項目 (35.3%) と最も低く、S2は8項目 (47.1%)、S3とS4は10項目 (58.8%) であった。

先ほど3.2 各項目群の評価でも述べたが、評価の一致が完全に見られた項目は「文章の長さ」であった。その一方で、全く一致しなかったのは、項目群「日本語 (適切さ)」の最初にある項目「文型・構文が同じものばかりでなく適切に使われている」であった。

その他、教員・学習者間評価の一致・不一致の割合が高かった・低かった項目を挙げる。4名のうち3名の一致 (75%) が見られた5項目、1名のみ一致 (25%) の5項目について、表3に示す。

4. おわりに

4.1 考察

先ほど1.1 実践の背景で示した田中 (2016) の「ライティング評価における評価の不一致 (ばらつき) をもたらす要因」として挙げた3点の観点を用い、考察を行う。

- 1) スクリプト (書き手の第二言語のライティング能力)
- 2) 評価基準や評価方法 (評価者おのおのの優先順位)
- 3) 評価者 (評価に対する姿勢やライティング観)

4.1.1 スクリプト (書き手の第二言語のライティング能力)

本稿での「スクリプト」とは「最終課題レポート」、「書き手」は「学習者」であった。田中 (2016) と異なる点は、評価者が「複数の教員」ではなく筆者1名であり、他の評価者4名が学習者で自己評価だったという点である。その結果、全体的に教員よりも学習者の方の評価が高かった。中でも注目すべきは、「日本語 (正確さ)」と「日本語 (適切さ)」についてで、S1以外の3名が、教員評価よりも自己評価が4～1点 (8～2%) 高かった。その要因として、以下のような2つの可能性が考えられる。

1つは、「教員の言語（日本語）に対する評価が厳しい」という可能性、もう1つは、「学習者が自身の外国語（日本語）」に対し、高め（甘め）の自己評価をしているという可能性である。この2つの可能性に関して前者では、教員の評価者を増やして評価の厳しさを検証する必要がある。また、後者では、学習者の母数を増やし量的な検証を行うか、1人の学習者を継続して評価活動を行ってもらおう等、質的な検証が必要であると考ええる。

4.1.2 評価基準や評価方法（評価者おのこの優先順位）

まず、評価の一致が完全に見られた「文章の長さ」に着目する。これは「2000字以上書いている」と明記されていたことが評価の一致につながったと考えられる。この点から、全く一致しなかった項目「文型・構文が同じものばかりでなく適切に使われている」については、改善する必要があると考える。

次に、教員との評価の一致が見られた2つの事例に着目する。「構成」では1名（S3）、「内容」では1名（S2）の評価の一致が見られた背景であるが、この結果は現場を振り返ってみると、教員側からは「よく個別にフィードバックしたところ」であり、学習者側からすれば「授業中、教員によく相談し、話し合ったところ」であった。特に、フィードバックに関しては「よくできている」と肯定的なフィードバックをしていた記憶がある。

その観点において、教員と学習者の点数で他より逆転現象が見られたS1を振り返ると、授業中のフィードバックで肯定的なフィードバックが少なかったという可能性がある。

さらに、フィードバックの少なさという観点において、「文の長さ」以外の4項目群の自己評価が教員よりも高かったS4を振り返ると、学期中欠席が複数回あり、最終課題の提出直前も、フィードバックがないままの提出となった。4名のうちS4のみが字数制限を満たせなかった点も、フィードバックが十分ではなかったという可能性がある。

4.1.3 評価者（評価に対する姿勢やライティング観）

評価者については、教員側視点のみで述べる。今回の実践を振り返って気づいたことは、評価を「評価項目のとおり評価したい」と考えながらも、ライティング、つまりレポート作成指導の際、「個別に対話やフィードバックを重ねながら、学習者の個性（書きたい内容）を守りつつ、自由に書かせたい」という、相反する考えがあったことである。

学習者に自由に書いてもらいながらも、評価基準を定期的にチェックしてもらおうような工夫や指導が今後は必要であると言えよう。

4.2 今後の課題と展望

以上、本稿では、「中級日本語学習者のレポートの評価は、どのような評価基準を持って評価することが望ましいか」について探ることを目的とし、中級レベルの日本語学習者を対象に行った評価活動についての実践報告を行った。その結果、総合評価では評価の一致が見られなかった。しかし、項目・項目群、学習者個人で見ると、「文の長さ」「構成」「内容」面で評価の一致が見られた。その要因には、文の長さについては「明確な記述」であったこと、また、実践の振り返りから、「肯定的なフィードバック」の有無・頻度が考えられる。

他方、評価の不一致には、「評価の厳しさ（甘さ）」も検証すべき課題であると考えます。課題解決のためには、今回のような実践を継続させつつ、さらに学術的な検証が質的・量的両方に必要であると言えます。

今後も引き続き、ライティング能力が中級レベルの学習者の文章を対象に、評価研究・実践を行っていきたい。そして、将来、学内外の日本語教育機関において、1つの「中級学習者にとっても分かりやすい日本語で書かれた中級ライティングの評価基準」として還元され、かつ、日本語教員・学習者双方の「評価リテラシー」が育まれる研究となれば幸いである。

【注】

1. 日本語能力試験は、日本国内外において、日本語を母語としない人を対象として日本語の能力を測定し、認定することを目的として行われる世界最大規模の日本語の試験である。レベルはN1～N5の5つあり、N1が最も難しく、N5が最もやさしいとされている。(https://www.jlpt.jp/about/purpose.html 閲覧日：2018年8月1日)
2. 日本語能力試験「過去の試験データ」より、2017年7月と12月に2回日本国内で実施された試験の受験者数を合算しグラフ化した。
3. 評価リテラシー（英：Language Assessment Literacy (LAL)）とは、言語能力の評価にかかわる一連の手續きに必要な技能的知識 (knowledge skills) と言われている。具体的には、①評価方法の設計、②評価の実施、③評価結果の解釈、④評価結果の活用、⑥評価の事後報告に求められる技能的知識である（伊東：2018）。
4. 採点ルーブリックには、望まれる学力 (achievement) のスタンダードに照らして、生徒（本稿では学習者）が到達するだろうと期待されるパフォーマンスのレベルが記述されている。これらの記述語 (descriptors) は、パフォーマンスに関する記述であり、生徒（学習者）の作品（本稿ではレポート）のなかにどのような特徴や徴候を探せばよいのか、準備されている尺度 (scale) のなかにその作品（レポート）をどのようにして位置づけるのかといったことを評価者に伝える（Hart：1994、田中監訳：2012）。
5. 授業内容はレポート作成に特化していたが、そのほか日本語能力試験対策（N1レベルの語彙や文法）も行ってた。また「中級後半レベル」の判断は、授業開講前に「J-CAT日本語テスト」（コンピュータによる日本語学習者のインターネット日本語能力自動判定テスト）のスコア表を基に行った。
6. 「Japanese III-1」でのレポートに関する課題・成果物は、オンラインでファイルや文書の作成が可能な「Google ドライブ」上で全て保存・共有を行っていた。ルーブリックも同様に、クラスの共有フォルダ内にあり、いつでもどこでも閲覧・編集ができるようにした。最終課題レポートも上記フォルダ内に提出するよう指示した。

【参考文献】

- Dannelle D. Stevens and Antonia J. Levi (2012) 『Introduction to Rubrics: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning』 Stylus Pub Llc、佐藤浩章監訳 (2014) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』 玉川大学出版部
- Diane Hart (1992) 『Authentic Assessment: A Handbook for Educators』 Dale Seymour Pubn、田中耕治監訳 (2012) 『パフォーマンス評価入門「真正の評価」論からの提案』 ミネルヴァ書房
- 伊東祐郎 (2018) 「日本語教育におけるこれからの評価研究を考える」2018年度日本語教育学会春季大会パネルセッション1 (PPT 資料)
- 佐々木瑞枝、細井和代、藤尾喜代子 (2006) 『中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶための日本語ライティング 短文作成からレポート作成まで』 (The Japan Times)

田中真理・阿部新（2014）『Good Writing へのパスポート—読み手と構成を意識した日本語ライティング—』
くろしお出版

田中真理（2016）「パフォーマンス評価はなぜばらつくのか？アカデミック・ライティング評価における評
価者の『型』」宇佐美洋編『評価を持って町に出よう「教えたこと・学んだことの評価」という発想を
超えて』くろしお出版

日本語能力試験「過去の試験データ」<https://www.jlpt.jp/statistics/archive.html>（2018年7月4日閲覧）

【添付資料】

資料1 初回授業で学習者が書いた作文

※段落開始のスペース有無、誤字・脱字等は手書きのとおりに記載

※個人が特定できそうな語彙・表現は削除

<p>S1</p> <p>関西学院大学国際学部に来てからの生活はとても豊かだと思います。一年生の頃は色々な部活やサークルの新歓に参加し、先輩から色々な情報を手に入れました。それに加えて、日本人の友達がたくさんできて、多国籍の交換留学生達と交流できたから世界中の文化について学びました。さらに日本語の授業で先生方に日本の文化、言語などを教えられ、日本人の考え方や文化を理解できるようになりました。2018年からは二年生になり、先輩としての役割がありました。後輩たちが履修登録のことをとても悩んでいたのも、色々な電台をして、安心させようと思いました。これからは先輩として後輩たちを手伝おうと思います。</p> <p>部活、サークルなどの役割も与えられたので、今年はかなり忙しいです。ピラ作り、イベント管理、イベント報告の仕事任せられたので、自分のプライベートの時間と勉強時間がなくなりました。大学の授業や生活などは確かに漢しいと思いますが、作った友人や得た経験は絶対に自分の将来に役立つと思います。</p>
<p>S2</p> <p>僕が関西学院大学に入学したからの生活はそれこそがっおと家を毎日行ったり来たりする生活を繰り返したのです。学校いるときには授業があつたら行ってその以外の時間はいつもグローバルラウンジで友だちと話しながらいったんです。夏とか春休みになったらいつも国に帰って国にいる友達とか両親と一緒にお酒とか飲んだり遊びに行ったりしながら時間を過ぎて新しい学期が始まる時になったら日本に戻って来て新しい学期の準備とかをしながら過します。学期中の週末のような短い体みの時には友達と会ってクラブとかカラオケとか言って遊んだりします。新しい学期になったら交換留学生プログラムでいた友達がまた自分の国で帰ったり日本人の友達が交換留学を行って寂しくなる時もあるのですが楽しい大学生活を楽しんでいます。</p>
<p>S3</p> <p>私は、一年間自分でアルバイトをし、学費のお金をためてきました。受験を受けて受かったのが春学期から入学をしました。関学に来て本当にうれしい気持ちです。高校の時から関学に行きたい夢があつたので今自分がこの大学に来ていることを両親に感謝しています。友達もたくさんでき、勉強もとても興味深いので、勉強を頑張りたい気持ちがとても持つようになりました。最初はたくさん不安なことがあり、自分でも大学に来て本当によかったのかと思ひ込んでしまうことがあつたが、友達や先生のサポートがあつたからこそ、今自分は大学二年間として学生生活を楽しむことができ、よかつたです。生活がいつぱんに変わってしまい、今現在一人暮らしでバイトをし、学費、食事などを自分で払わなければならないと、不安もあるがあの学生生活をがんばりたいです。</p>
<p>S4</p> <p>私には叶う夢がある。その夢を叶うために勉強がとてもたいせつなので日本語学校行って、日本語のレベルがたりなかつたのでまた専門学校に入学してから関学に入学しました。私はふつうの大学生とはとても違う生活をしている。私は学費も自分で払っているので自分の生活費と学費とどきどき家族にもお金をおくらないといけない。最初は、全く自言がなかつたけどどんどん年をとっているの今じゃないといつまでも来きなくなることを準備して前に進むことにした。去年は、私の人生の今までのいちばんたいへんなときあつた。毎日みんなはちゃんと勉強する時間。遊びに行く時間たくさんあると思うけど、私は一日24時間が足りないことだつた。毎日学校と仕事がおそくまで、そのあとがレポートなどで寝るじかんがほとんどなかつた。それでからだ病気がなつたり学校来れなくなつたときもあつた。</p> <p>それで成績わるくなつたこともある。去年の成費で今は家賃いらなくて合格したし、小さい奨学金も合格したから今はちょっと生活が楽になつたけどこれからもっといい成績をとって、大きい奨学金をめざしている。バイトと勉強はとても大変のはわかるけどつらくても今は頑張っていつたら将来はいいこと待っていると信じている。</p>

資料2 フィードバック用 チェック式ルーブリック

チェック項目		優秀(✓✓)・良い(✓)	復習が必要☒
日本語	正確さ	・文法に間違いがない。	<input type="checkbox"/> 文法
		・文型・構文が正確に組み立てられている。	<input type="checkbox"/> 文型・構文
		・語彙・表現に間違いがない。	<input type="checkbox"/> 語彙・表現
		・表記(ひらがな・カタカナ・漢字)に間違いがない。	<input type="checkbox"/> 表記
	適切さ	・文型・構文が同じものばかりでなく適切に使われている。	<input type="checkbox"/> 文型・構文
		・語彙・表現が適切に使われている。	<input type="checkbox"/> 語彙・表現
		・文末スタイル(「普通体」あるいは「丁寧体」)が適切に使われ、統一されている。	<input type="checkbox"/> 文末スタイル
		・表記(漢字やカナ、句読点や符号、数字など)が適切に使われ統一されている。	<input type="checkbox"/> 表記
		・相手(読み手)を意識・配慮した文が適切に書けている。	<input type="checkbox"/> 相手への配慮
		・ルール(メール・メモ・原稿用紙)に気をつけて書いている。	<input type="checkbox"/> ルール
構成	文のつながり	・構成(文章・段落のつながり)がわかるように書いている。	<input type="checkbox"/> 構成
		・文と文のつながりがスムーズである。	<input type="checkbox"/> 文のつながり
		・文と文をつなぐ接続表現(「たとえば」「しかし」など)が効果的に使われている。	<input type="checkbox"/> 接続表現
		・指示語(「この」「その」など)が効果的に使われている。	<input type="checkbox"/> 指示語
内容	自分の意見 話題(トピック)	・自分の意見(一番言いたいこと)がはっきり書いている。	<input type="checkbox"/> 自分の意見
		・話題(トピック)をよく理解し、それに合った内容で書いている。	<input type="checkbox"/> 話題(トピック)
最終課題レポートの長さ		2000字以上書いている。	<input type="checkbox"/> 2000字書けない
【教員からのコメント】			

資料3 最終課題レポート 採点ルーブリック
Japanese III-1 (RW)

提出者: / 50

チェック項目		優秀(3)・普通(2)・復習が必要(1)	3・2・1
日本語 (30)	正確さ(12)	・文法に間違いがない。	3・2・1
		・文型・構文が正確に組み立てられている。	3・2・1
		・語彙・表現に間違いがない。	3・2・1
		・表記(ひらがな・カタカナ・漢字)に間違いがない。	3・2・1
	適切さ(18)	・文型・構文が同じものばかりでなく適切に使われている。	3・2・1
		・語彙・表現が適切に使われている。	3・2・1
		・文末スタイル(「普通体」あるいは「丁寧体」)が適切に使われ、統一されている。	3・2・1
		・表記(漢字やカナ、句読点や符号、数字など)が適切に使われ統一されている。	3・2・1
		・相手(読み手)を意識・配慮した文が適切に書けている。	3・2・1
		・ルール(原稿用紙のルール)に気をつけて書いている。	3・2・1
構成 (12)	文のつながり	・構成(文章・段落のつながり)がわかるように書いている。	3・2・1
		・文と文のつながりがスムーズである。	3・2・1
		・文と文をつなぐ接続表現(「たとえば」「しかし」など)が効果的に使われている。	3・2・1
		・指示語(「この」「その」など)が効果的に使われている。	3・2・1
内容 (6)	自分の意見 話題(トピック)	・自分の意見(一言言いたいこと)がはっきり書いている。	3・2・1
		・話題(トピック)をよく理解し、それに合った内容で書いている。	3・2・1
最終課題レポートの長さ (2)		2000字以上書いている。	2・1
【教員からのコメント】			